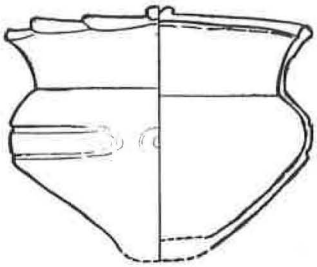
埋蔵文化財包蔵地調査概報 6

馬場川遺跡 Ⅱ



（S地点出土縄文式土器）

1971.3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市教育委員会
教育長　益倉辰次郎

各種の開発事業による埋蔵文化財包蔵地の破壊と保存をめぐる問題は、社会的な動向として関心が寄せられるようになりました。数多くの埋蔵文化財包蔵地をもつ大阪府下においては日々その度合を加えています。

こうした現状の中で、本市では昭和44年度より５カ年計画を立て、市域に所在する埋蔵文化財包蔵地の周知徹底、事前協議体制の確立、範囲確認調査の実施など、その保存対策を進めています。

本市横小路町に所在する馬場川遺跡は、府下でも数少ない縄文時代の遺跡でありますが、宅地や工場用地として次々と失われて行く現状から、昭和44年度に国庫および府費による補助事業として発掘調査を実施しました。その結果、出土遺物の量とその豊富さにおいて西日本では稀有の遺跡として注目を浴びることになりました。

遺跡の範囲は相当のひろがりをもつことがわかったため、昭和45年度も継続して調査を行なうことを計画しましたが、幸い、続いて国庫・府費補助金の交付を受けることができ、昭和45年７月から12月にかけて総額80万円の事業として調査を実施しました。

炎天下の作業につづき、資料の整理に従事下さっている調査員ならびに学生諸君のご労苦と、関係各位のご協力に対し、ここに記して感謝の意を表します。

例　言

1　この冊子は、昭和45年度文化財保護事業として、国庫および府費の補助金を得て実施した、東大阪市横小路町３～４丁目に所在する馬場川遺跡調査の概報である。

2　調査は東大阪市教育委員会を主体として同主幹藤井直正が担当し、日本考古学協会会員荻田昭次、江谷　寛、柏原市立柏原中学校教諭竹下　賢、東大阪市立縄手小学校教諭奈良英弘の四氏のほか、原田　修君を調査員に委嘱した。また多数の大学・高校学生諸君の参加・協力を得たが、その氏名は巻末に列記した通りである。

3　出土遺物は、縄文式土器片・石器・土製品などかなりの量に上るが、現在その整理作業を進めている段階である。

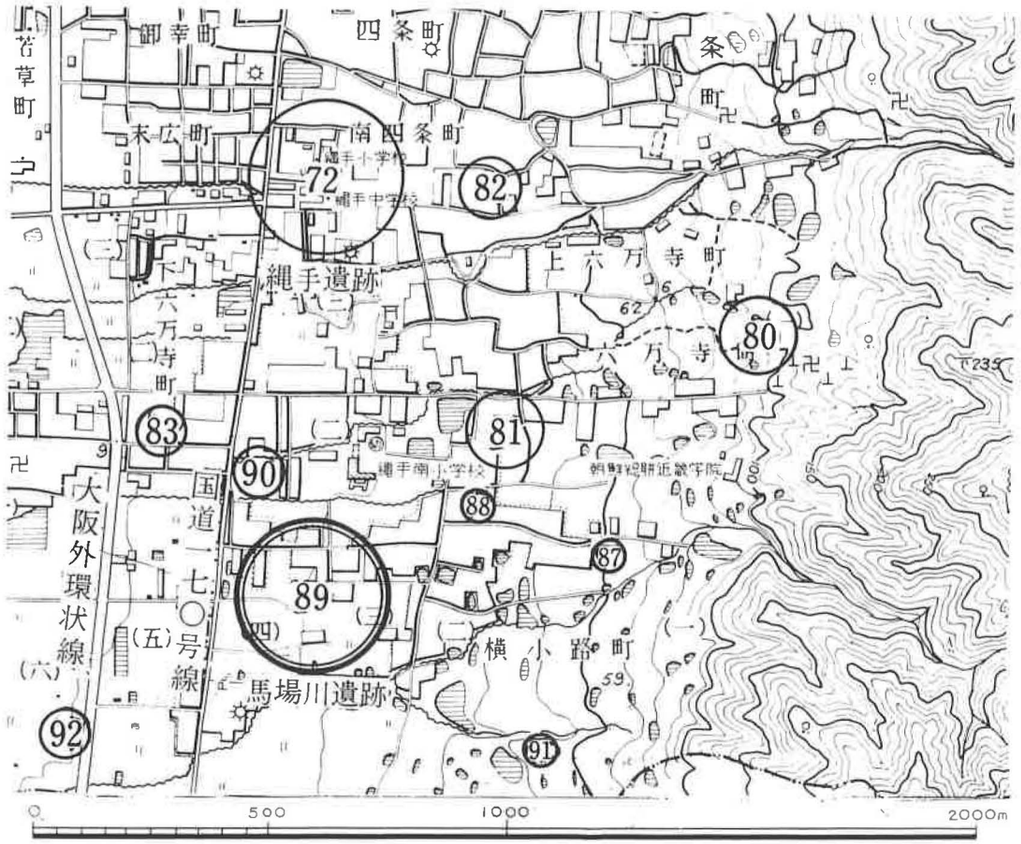
4　本調査概報の執筆分担は次の通りである。

調査の経過・まとめ……藤井　直正
遺跡の範囲・遺跡の状態……原田　修・竹下　賢
出土遺物……荻田　昭次

5　昭和44年度の調査については、馬場川遺跡Ｉを参照されたい。

目　次

はしがき……2
例　言……2
位置と環境……4
調査の経過……5
遺跡の範囲……6
遺跡の状態……7
出土遺物……9
まとめ……11
調査参加者名簿……12



72　縄手遺跡（縄文～古墳）	83　段上遺跡（古墳）	90　コモ田遺跡（古墳）
80　岩滝山遺跡（弥生～古墳）	87　常光寺古墳	91　萩山古墳
81　半堂遺跡（　〃　）	88　大賀世古墳	92　西代遺跡（古墳）
82　幸殿遺跡（　〃　）	89　馬場川遺跡	＜数字は東大阪市遺跡番号＞

第１図　馬場川遺跡の位置と付近の遺跡（1/3,000）

位置と環境

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町３～４丁目に所在する縄文時代の遺跡である。近鉄奈良線瓢箪山駅の南方約 1.5 km、南北に通じる国道 170 号線から 300m ばかり東へ上ったところ一帯にひろがっている。

遺跡の所在する付近一帯の地形は、生駒山地の一峯岩滝山から流下する何本もの谷川によって形成された複合扇状地の末端、東から西の方向に向かって下降する傾斜面で、標高 18～20m をはかるところに立地している。ここから西方へは、恩智川に至るまで漸次ゆるやかに傾斜し、縄文時代には現在の国道 170 号線あたりまで水面がひろがっていたものと考えられる。遺跡のひろがる地域一帯は、数年前まで水田のつづく田園地帯であり、その中に横小路の集落1)が存在しているだけであったが、近年集落の周辺部が新しい住宅と工場が立ち並び、市街地化が急速に進んで来ている。

生駒山地の西ろくを占める東大阪市の東地区（旧枚岡市域）は、府下有数の遺跡密集地域であり、本遺跡のまわりにも各時代の遺跡が集中している（第１図参照）。まず北方 700m には、縄文時代から古墳時代の複合集落遺跡である縄手遺跡がある。この遺跡は、昭和44・45年度に学校建築に伴う調査によって縄文時代後期の遺構を検出し、多数の遺物が出土した。いろいろな点において本遺跡と関連をもつ遺跡である。

弥生時代・古墳時代の遺跡は六万寺町・横小路町の各所に点々と分布しているが、中でも本遺跡の東北方 500m には弥生後期の半堂遺跡、東北方 1.5km には昭和44年「こうぎり自動車道」の新設工事によって見つかった岩滝山遺跡2)がある。なお弥生時代の土器は本遺跡の H・I・N の各地点からも出土している。古墳も本遺跡の東方 300m にある大賀世古墳3)のほか、横小路町の東方山腹一帯に散在している。横小路町の南は八尾市域の楽音寺であるが、そこには４世紀に築造された西ノ山古墳4)の存在する丘陵を望見することができる。

第２図　N地点の調査風景

1）近世には河内郡横小路村、明治22年以降枚岡南村大字横小路とよばれていた村落である。

2）『岩滝山遺跡』（埋蔵文化財包蔵地調査概報５、昭和46年３月参照）。

3）直径約30mの円墳で、現在墳丘上に大賀世神社がまつられている。かつては周濠をめぐらしていたようで、昭和35年その北側で形象埴輪等が出土した。

4）大正14年、開墾中に竪穴式石室が発見され、多数の遺物が出土した学界著名の古墳である。

調査の経過

馬場川遺跡は、東大阪市横小路町に所在する縄文時代の遺跡である。昭和42年以降、工場・宅地の建設に伴って縄文時代晩期の遺物が出土し、府下における数少ない縄文時代の遺跡として注意を払って来た。

遺跡の所在する付近一帯は、最近になって工場用地もしくは宅地となり、遺跡が刻々失われて行く現状にあるため、本市では昭和44年度文化財保護事業として、遺跡の範囲を確認するための調査を計画した。幸い文化庁より埋蔵文化財包蔵地緊急調査補助金の交付を受けることができ、国庫補助事業として調査を実施した。この調査の開始直後、横小路町４丁目の敷地約 2,300m² に亘って工場の建設されることがわかり、急拠この区域のうち 1,000m² について記録保存をはかるための発掘調査を合わせて実施した。この結果、遺跡の範囲がかなり広い面積に及ぶことがわかり、縄文晩期滋賀里式に伴う遺構や多数の遺物が出土し、本遺跡の重要度を加えることになった。

こうした点から、本市教育委員会では昭和45年度の文化財保護事業として本遺跡の調査を継続して行なうこととした。幸い本年度も国庫及び府費の各補助金を受けることができ、総額800,000円をもって、昨年度につづいて、遺跡範囲の確認を目的とする調査を実施した。

今年度の調査は、これまでに確認している区域の外周部にN～R５カ所の地点を選び、それぞれトレンチまたはグリッドを設定し、遺物包含層および遺構の検出をはかった。さらに昨年度調査したF地点との関係を把握することを目的として、東側に隣接するS地点の調査も合わせて実施した。

各地点における調査の結果は後述の通りであるが、既調査区域を合わせて本遺跡の範囲は東西約300mに及ぶことが明らかになった。また今年度新らしく調査を行なったN地点では縄文時代後期、O地点では同中期後半の土器が出土したことは重要であり、本遺跡が従来の予想をこえて縄文時代中期から晩期に及ぶ集落であること、地点によって時期が異なることなど、いくつかの問題が提起されることになった。しかし本年度における調査は全面発掘ではなく、遺跡範囲の確認を目的とする小規模な発掘にとどめたが、こうした問題の究明は未確認の南辺の調査とともに将来を期したい。

第３図　Q地点の調査風景

現地における調査は７月18日に開始し、８月28日まで延37日間を費やし、この間大学、高校生延 358 人の参加を得た。調査員各氏をはじめ、これらの諸君の労苦に感謝を表するとともに、土地所有者各位、直接間接お世話になった関係各位に感謝の意を表する次第である。

遺　跡　の　範　囲

本年度の調査は、とくに縄文時代の遺跡がどの程度の平面的な広がりを持ってのびているかを確認するための調査として、昨年度の調査地点（F～L地点）より出来る限り離れた地点での遺物・遺構の存在の確認を目的とし、F～L地点のFを中心として、南西方80mの地点をN地点、さらにN地点より70m西方の地点をO地点、北方140mの地点をP地点、F地点より北東180m、P地点の東方100mにあたるQ地点、東方へ180mのR地点の計5カ所を設定して調査を行なうと同時に、昨年度調査の際、遺構の性格について不明瞭な点を残したF地点の南半部の東に接してS地点を設定し、遺構の確認につとめた（第4図参照）。

本年度の調査は、F～L地点の東西線を境として北方部の休耕地ないし空地の調査に片寄ったきらいがあるが、これは南方部が水田地帯で、時期的に調査の機会が得られなかったためであり、今後南方部の調査を進めていきたい。

今回の調査の結果、もっとも西に設定したO地点において、これまでに本遺跡で局部的に検出されていた縄文後期後半の土器群よりもさらに古い、中期末葉に比する土器群の出土を見たことに加え、N地点での後期初頭の中津式に比する土器群の包含は、本遺跡の性格を複雑化し、さらに本遺跡の範囲をさらに西方にひろげる結果となり、所期の目的は一応達成された。遺跡の西限は、O地点西方の国道170号線（東高野街道）近くまでのびている可能性をもっている。これに対し、もっとも東端に設定したR地点では、まったく縄文時代の遺物を検出できず、遺跡の東限は昭和43年度の調査地点であるB地点（滋賀里式、F地点の東方100m）との間で限られる様であり、時期的な複合を考え合わせても縄文中期末～晩期初頭にあたる縄文遺跡として、南北約250m、東西約300mを越える広大な面積を占めることが明らかになった。

一方、遺跡の北限の確認のためのP・Q両地点では、包含層は奈良時代の須恵器・土師器を含む層のみで縄文時代の遺物は検出できなかった。これは、地形的にみてもP・Q両地点が、扇状地末端部の中でも、いく本にも分かれて流れる谷川の分岐点に近いところに位置し、現在でもP・Q両地点の北に接して小川が流れており、地形的にもK～L地点より標高が低く、遺跡の北限はこの間で限られている感が強い。

第4図　遺跡周辺平面図（円は遺跡の範囲を示す）

遺　跡　の　状　態

N地点　昨年度の調査地点（F～L）の南、L地点の西80m、日高鉄工所所有の空地がN地点で、敷地は、南北約40m、東西約15m、面積約600m²で、内部に3m四方のグリッドを東西に2列、南北に8列計16のグリッドを設定し、この内、1・4・6・8・12・16の各グリッドを調査した。

グリッド1・4では第3層中に若干の弥生時代後期の土器片を包含し、グリッド6の第4層中（茶褐色土層）に縄文晩期滋賀里式土器を包含していたが、他のグリッドでは、ほとんど検出しなかった。これは、昨年度の調査地点であるF～L地点のうち、西端部のL地点を西に進み、地形的に稍下るに従い滋賀里式土器の出土量が減っていったことを考え合わせると、滋賀里式の時期の西限が近い状態を示している様に思われる。さらに、本地点の南半部にあたる、6・8・16の各グリッドの6層中に比較的多量の中津式に比する縄文後期初頭の土器群と共に多くの石錘を検出し、7層上面において、ピット群を確認した。このピットは柱穴かと思われ、住居跡の可能性をもっていて、床面での高さ標高18.6mを計る。

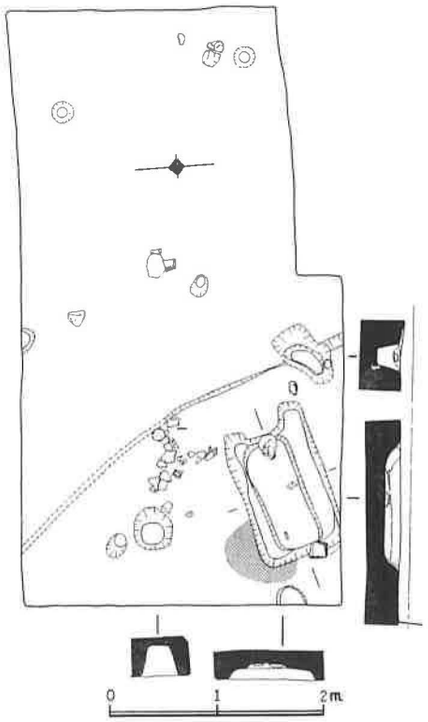
O地点　N地点よりさらに西方へ約70m離れた地点で、幸いにも休耕地であったため調査を行なうことができた。試掘は、約450m²の南北に長い敷地の北端と南端近くに、幅2m、長さ4mのグリッドを2カ所設定した。双方ともN地点で見られた様な黒色の粘土層は切れていたが、第4層の暗褐色砂質粘土層中に、縄文中期後半の要素を持つ（型式不明）土器片約30片を含み、下部は青灰色の砂層となり、他の時期の土器は検出し得なかった。地山面での高さは標高16.5mを計り、さらに西方へ続く可能性がこい。

P地点　F地点の北方約140mの地点で、F地点からゆるやかに傾斜していて、横小路谷の谷川の一分流に接している。調査は、約90m²の市有地に、南北に長く幅2m、長さ約20mのトレンチを設定した。遺物の包含状態は、奈良時代の須恵器・土師器を含む第4層の黒褐色土層のみで、下層には縄文・弥生時代の遺物は検出されなかった。したがって、縄文時代の遺跡の北限は、FよりP地点に至る間で切れていると考えることができる。

Q地点　本地点は、P地点の東方約100mの面積約520m²の休耕地で、東西に4列、南北に5列、計20ケ所のグリッドを設定し、調査を進めたが、湧水が激しく困難を極めたため、一応、トレンチによる断面観察に重点をしぼった。Q地点は、現地表で約23.7mを計り、約90cm下に続く第6層の黒色砂質粘土中に、P地点と同様、須恵器・土師器片を検出したが量は多くない。尚、断面の7層上面から幅約120cm、深さ約80cmの溝が掘られていることを確認した。P・Q両地点を中心として、歴史時代（奈良時代？）の集落の存在が考えられる。

R地点　遺跡の東限を究明する手がかりとして、F地点の東方約200mの空地に2×4mのトレンチを設定し

第5図　N地点の遺構（グリッド8）



第６図　Ｓ地点の遺構実測図

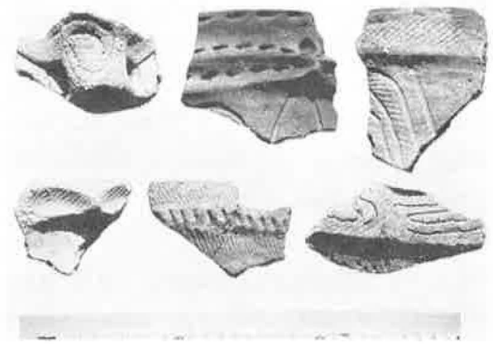
Ｒ地点とした。Ｒ地点は、これまでの各地点より最も高い標高約26.5mを計る。上層部は、後世の撹乱がひどく、第７層の黄灰色粘土層に至るまでの1.6mを計る各層には、何ら遺物はふくまれていなかった。したがって、遺跡の東限が、Ｂ地点（滋賀里式）と本地点との間にあることが考えられる。

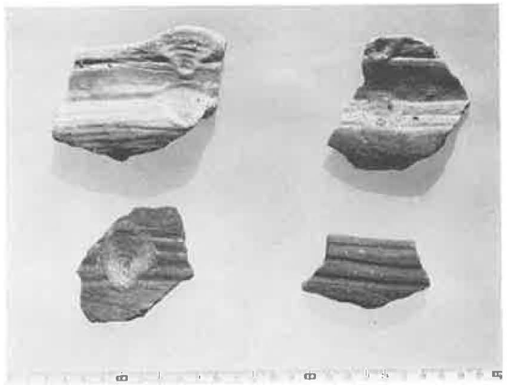
Ｓ地点　本地点は、昨年度行なったＦ地点の北半分に於て、竪穴住居跡を検出したのに対して、南半分が土偶・土製勾玉などが出土したにもかかわらず、遺構の性格の上において不明瞭な点を残していたので、Ｆ地点の東に接した、中岸恵治氏宅の空地をＳ地点として、幅３m、長さ６mのグリッドを東西に２列設定し、各々Ｓ－１、Ｓ－２として調査を行なった。Ｓ－１、Ｓ－２とも第５・６層中に滋賀里期の土器を比較的多く包含しているが、形式差が認められ、時期的に分類出来るものである。

遺構としては、第７層上にいくつかの浅いピットを検出したが、とくにＳ－２の西端部が、他の部分よりも黒色で粘質が強く、多量の土器片や石鏃がふくまれていた。この部分は、調査の結果、約15cmの深さを持つ落ち込みで底面は平坦で、掘り形は直線的であり、しかも床面には、掘り形と平行に並んで、径約20cm、深さ約27cmの２つのピットを検出し、さらに床面の一部が約60cmにわたって円形の赤褐色に焼けている部分があることなどから、方形の竪穴住居の一部であることが判明した（第６図）。ここで、特記すべきことは、住居跡床面に硬玉を加工した玉類の細片が散乱しており、しかも、それらは一点の臼玉を除いて、ほとんど穿孔中ないし研磨中の未製品である。このことは、原石の産地を遠く隔てた当地の集落の中において玉類の製作が行なわれた事実を物語るものである。

さらには、玉作りを行なっていた住居床面を穿って、本遺跡においては初めての土坑墓を検出した。土坑は、住居床面に見られた焼土部の¼程切って15cmの深さに穿たれているため、土壙の造作は、住居の建造時より遅れるものであるが、住居の使用途時であったか否かは断定を下せない。

土坑墓は、短辺83cm、長辺1.4mの長方形で、長辺をほぼ東西におき、長辺部は２段作りで、底面はほぼ平坦である。土坑内には、頭蓋骨が比較的良好に残り、東枕の方向をとっている。頭骨の下にあたる部分のみ、土坑の短辺を枕状に掘り残している。尚、土坑墓上と頭骨に接して、大小二点の管玉状石製品を検出したが、これらは穿孔されておらず、大形の一点は穿孔中であるため、これらの玉類も土坑墓に伴うものではなく、住居跡床面の硬玉製類の未製品に伴うものであろう。





第７図　Ｏ地点出土縄文式土器
第８図　Ｎ地点出土縄文式土器
第９図　Ｓ地点出土縄文式土器

出　土　遺　物

Ｏ地点の縄文式土器　Ｏ地点から出土した縄文式土器の量はわずかである。この地点はＮ地点より70m西方、標高で考えると約２m下位の地点にあるが、Ｎ地点の土器（主として後期―中津式併行のもの）より古い形式と考えられる中期後半の土器が若干出土している。

ただし、Ｎ地点下層にも若干中期の土器が出土している。今後、両地点の関連を究明する必要がある。

Ｎ地点の縄文式土器　Ｎ地点の縄文式土器は、本地点の第３層より第６層まで包含している。第７層以下は不明である。

本地点の第３・４層においては、晩期―滋賀里式併行のものを主とし、縄文後期のものが若干包含している。第５・６層において土器の量が多くなり、後期―中津式併行のものを主とし、津雲Ａ式、彦崎ＫⅡ式と併行するものを若干包含している。また、中期後半のものがわずかにある。

中津式併行のものとその他の形式の土器との、各グリッド・各層位における相関関係は、今後、相当時日の間整理・分析をした結果改めて報告することにしたい。

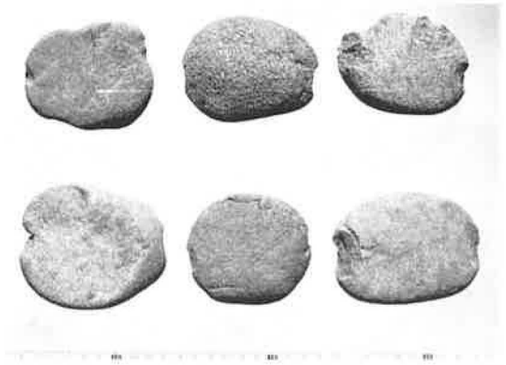
Ｓ地点の縄式文土器　Ｓ地点の縄文式土器は、本地点の第４層より第９層まで包含している。この地点の土器は、昨年度調査したＥ～Ｌ地点で出土した滋賀里式併行のものと比べて、精製された土器の文様が、結節点より展開する沈線文の文様がほとんどないこと、若干の宮滝式に近い土器を併存していることから考えて、晩期―滋賀里式より古く、後期宮滝式より新しいと考えられる土器を主として包含している。

また、この地点では、孤状文と直線文の沈線で飾った注口土器と、九州地方縄文晩期の段状の口縁のついた鉢型土器が出土している（表紙カット）。

土偶　土偶の腰部片と思われるもの１点が出土した。

土版　土版片と思われる破片が出土している。厚みが２cm、復原直径７～８cmぐらいのもので、両面とも外縁に不規則な沈線をほどこしている。

異形土製品　土偶かと思われるが、これまでの出土例がないので異形土製品とした。中実の作りで、脚部両端



第10図　石　鏃（N地点出土）
第11図　石　錘（N地点出土）
第12図　管玉状石製品（S地点出土）
第13図　硬玉製玉類・剝片（S地点出土）

に上部より穿孔をほどこしている。

スタンプ型土製品　スタンプ型土製と思われるものが１点出土した。床面、側面に縄文がほどこされている。

石鏃　すべてサヌカイト製である。基部は凹基になったものと、平基になったものとがあり、形状は、二等辺三角形状、正三角形状、五角形状のものとがある。墓坑を検出したＳ地点に石鏃が多く出土していることは注目される。他の石材を使用した石鏃は出土しなかったが、色調が乳白色・黄褐色のチャート剝片が数片出土した。また黒耀石の剝片が２点出土した。

石槍　サヌカイト製のもの１点が出土した。

石錘　15個の石錘が出土した。すべて、後期一中津式の土器が主として出土したＮ地点で出土している。15個中13個は砂岩製の扁平な河原石を利用したもので、長軸の両端または一端を欠いている（一端を欠いたものは他の一端に自然の凹みをもっている）重さ 90〜220ｇ。 他の２点は、一つは粘版岩製の重さ 28ｇの扁平な河原石を利用したもので、長軸の両端に研磨による切りこみがある。 もう一つは 風化の いちじるしい 花崗片麻岩製である。長軸をめぐらして研磨による溝がある、重さ 30ｇ。

石皿　完形のものは出土しなかった。砂岩製の自然石を利用しており、両面に磨き、または叩きの作業による磨耗の凹みがある。叩き石とセットにして使用したものであろう。

叩石（磨石＝すりいし）　扁平な砂岩製の自然石を利用している。上下の広い面に磨きあと、縁に叩きあとを残している、重さ 700〜800g。石英製のものが１点ある。

管玉状石製品　２個出土した。１つは長さ2.8cm、直径 0.8cm、１つは長さ 7.0cm、直径 1.2cm をはかり、いずれも蛇紋岩様の石材を原石として表面に磨研を加えたもので、仮りに「管玉状石製品」とよぶことにした。２個のうち長い方の１個は一端より７〜８ミリばから穿孔を施した形跡があり、石材が硬くて全体の穿孔を放棄したように思われる。そのため生じたひび割れが生じている。縄文時代の遺物としてはめずらしい。

硬玉製臼玉　完形のもの１点を検出した。直径1.0cm、厚さ 0.6cm、中央を穿孔している。

硬玉製玉類の剝片　小片であるが数点を検出した。３点は穿孔をほどこし、１点は割れて穿孔のあとをのこし、１点は扁平に加工しているが、穿孔を施していない。

ま　と　め

以上本年度に実施した馬場川遺跡の調査結果を略述したが、これまでの成果に加えて、遺跡の範囲や性格について種々の知見を得ることができ、本遺跡のもつ重要性をさらに加えることになった。

まず遺跡の範囲は、当初予想していたよりも西方にのび、昨年度に全面発掘を行なったＦ〜Ｌ地点を中心に東西 300ｍ に及んでいることが明らかになった。本年度の調査によって、遺跡の北辺および東辺を大よそつかむことができたが、西辺はＯ地点よりもさらに西方にのびているものと推定される。これについては、未確認の南辺の調査とともに昭和46年以後の調査に期したい。

本年度新らしく調査を行なったＮ地点では、上層に晩期滋賀里式の土器が若干出土し、その下に後期中津式併行の土器が相当量出土した。またこの時期に伴うものと考えられる柱穴を検出し、住居跡である可能性があるが、全面発掘を行なっていないため規模・構造等は現在のところ不明である。したがって、このＮ地点を中心として後期初頭の集落が考えられること、16個の石錘が出土したことによって漁撈を生業としていた海辺の集落であったことなど、今後解明すべき多くの問題を提起している。またこのＮ地点で出土した中津式の土器は、府下の縄文遺跡ではじめての発見例であり、中津式特有の渦巻文に縄文を施したもの、沈線だけのものとの二種類があり、大部分は生駒山ろく地域特有の土を用いて茶褐色を呈しているが、中に胎土の異なるものがあり、その渦巻文は流暢で瀬戸内海地域からはこばれたものと考えられる。

Ｏ地点から出土した土器は、中期後半の特色を有し、中に加曽利Ｂ式併行のものがみとめられる。これらの資料によって、本遺跡が少なくとも中期後半にはじまることが明らかになった。こうして見ると、本遺跡は古い時期においては海辺の汀線に近く、小規模な集落であったが、漸次小高いところに移動し、晩期滋賀里式の時期にかなりの規模をもつ集落になったことが知られる。

第14図　遺物出土状態（Ｎ地点）

Ｓ地点においては住居跡の一部を検出し、この住居跡から硬玉の剝片と玉の未製品が見つかったことも重要である。管玉状石製品はめずらしい遺物であり、その機能・性格は今後の検討をまちたい。硬玉製玉類は、おそらく硬玉の原石を入手し、ここで加工したものと考えられ、縄文時代における硬玉の交易に重要な資料を提供するものである。さらにこの住居跡の床面を掘り込んだ土坑墓が発見され、頭骨を遺存していたが、住居跡と土坑墓との関係には重大な問題がひそんでいるように思われる。

以上今年度の調査結果をまとめたが、くわしい検討は後日を期したい。

調査参加者名簿

調査補助員	下村和子			
	本城節子			
	北野　保			
	大和賢三			
	川本賀一			
早稲田大学	坂元直哉			
阪南大学	上村邦夫			
神戸大学	中塚金子			
明治大学	新田　洋			
大阪市立大学	永井廉章			
関西学院大学	永井俊博	岡本和三		
立教大学	居村恵市			
浪速女子短期大学	山下雅子			
大阪樟蔭女子大学	津田美智子			
神戸山手女子短期大学	今村寿子	片倉加寿子	酒井恵美子	平岡房枝
	広田みわ	藤原香代子	山野恵子	
大阪府立花園高等学校	井田和太	出崎真利子	岡崎良子	岡村一人
	正田直行	巽　幹子	中島康博	西山宏司
	松井優子	安田定子	山田喜庸	
大阪府立四条畷高等学校	和泉千代	岡崎　茂	加地由紀子	小森尚美
	沢水弘江	鈴木英明	高塚成信	中山大一
	藤井隆子	矢野和子		
大阪府立山本高等学校	松岡良憲			
大阪府立八尾高等学校	室屋孝史			
大阪市立南高等学校	西村仁士	高木　武		
追手門学院高等学校	奥井治郎			

ほかに、　柏原市立柏原中学校・東大阪市立新喜多中学校・東大阪市立玉川中学校　生　徒

馬場川遺跡 II

埋蔵文化財包蔵地調査概報 6

1971. 3

東大阪市教育委員会